

二〇一六年度（平成二八年度）

中学校第一回

入学試験問題

国 語

注 意

左のことをよく読んで、解答用紙に解答を書きなさい。

（ア）はじめに、受験番号と氏名を解答用紙（一枚）に書きなさい。

（イ）問題をよく読んで、解答用紙のきめられた場所に解答を書きなさい。

（問題用紙に解答しても無効です）

（ウ）時間は五〇分です。

（エ）この問題用紙は持ち帰ることはできません。試験終了後、回収します。

※答えは、別紙の解答らんに書き入れなさい。

一、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

なぜサマン岬の先なんかまで来たのだろうか？　ここに大人が来ることはほとんどない。彼がぼくたち子供に用があるとはとても考えられなかった。それに、ぼくたちならいつだってホテルの近くにいたのだ。ひよつとして、あの倉庫に關係のあることかなとぼくは考え、ぞくつとした。今にもその人は黒い靴くろいぐつから鍵を出して倉庫の扉を開き、灰色のふわふわのお化けを連れ出すのかもしれない。ぼくは横目で倉庫の方を見た。そこでようやく、灰色のお化けはエンリカが勝手に考えた話だったと気づいた。

埠頭ふとうの横の階段の方からべたと裸足の足音が聞え、エンリカとカイがそつと顔をのぞかせた。上が急に静かになったので変に思ったらしい。エンリカは、男の人の顔を見ながら、ゆつくりとあがってきた。スカートから水がぼたぼた滴っている。その背中に隠れるようにカイがついてくる。男の人はエンリカを見てますます困った顔になった。子供たちがみんな自分で自分をいじめると思っているのだろうか。

ぼくが、もういいかげんにその人をほって置いてまた遊びはじめようとみんなに言いかけた時、その人は意を決したようにこちらの方へ歩きはじめた。真正面にいたグラジオともう一人の子があわてて後へさがった。男の人はぼくたちにはかまわず、埠頭の中央あたりまで行って、靴をコンクリートの上におろし、しゃがんで蓋ふたを開けた。ぼくたちは遠巻きにしてそれを見ていた。その格好かっこうを横から見ると、その人の肩はとても薄く、黒い服を着てうずくまっているさまは夕方になると街の空を飛ぶ蝙蝠ふつふつのようだった。

「あのんだれ？」とそばへ来たエンリカがぼくに小声でたずねた。

「ホテルのお客だけど、何をする人か知らない」とぼくも小声で答えた。

男の人は靴の中をひつかきまわして、なにか短い棒を一本取り出し、またきちんと蓋を閉めて立ちあがった。手にその棒を持った姿はもう気弱そうではなく、

めた。ぼくの顔だった。みんながぼくの方を見てくすくす笑った。男の人もここにこしながら得意そうにぼくをちらりと見た。ぼくは恥ずかしくて、顔が熱くなった。

やがて、その花火も終わった。男の人は後ろに置いた靴のところへ戻り、中から前のよりはいぶ太いのを一本取り出した。今度のは火をつけると紫色の火のタバが空のずつとずつと高い所まで伸びた。先の方がまぶしく白く光っていた。男は花火を持った手をゆつくりと横に動かした。高い空に白い長い線が一本水平に引かれた。それと同時に花火の紫の火は消えてしまった。

空に描かれた白い線から、巻いた布をほどくように、一つの光景がゆつくりと繰り出されて降りてきた。それはどこか遠くの大きな町で、ぼくたちはそれをちよつと離れた丘の上から眺めるように、見ているのだった。町には高い塔のついた奇妙な建物がいくつもあり、塔の先端には細くて長い旗がなびいていた。建物はみな薄い黄色で、屋根はくすんだ赤だった。左の方に川があり、橋がかかっていた。遠くから見ているから人の姿は見えなかったが、人がたくさんいてにぎわっているように思われた。町のずつとむこうにはケワけわしい山々がそびえており、その山々はみな白かった。あれが雪というものなのだろうか。

③ ぼくは自分がサマン岬にいることを忘れてしまった。空にかかった絵は、Dをこらすといくらでも細かいところまで見えるようで、その建物や城壁、小さなアーチや橋やたくさん細くて高い木々などが、ぼくの目を捕えてはなさなかった。誰も声をたてなかった。

ずいぶんたつたと思われる頃、空にウツつた光景はゆつくりと薄れはじめ、やがて上端の白い線を残して消えて、その線も最後にはすっかり見えなくなった。みんながため息をついてあたりを見まわした。ぼくは不思議な人になぞねたいことがいくつもあったが、喉がこわばって声が出なかった。男の人は手の中に別の花火を用意していた。すぐにそれに火をつけた。

さつきと同じように空に白い線が描かれ、光景がそこから降りてきた。今度のは海だった。青黒い暗い海に白い山のようなものがいくつもそびえている。あれは

小柄で細いにもかかわらず、堂々としていた。棒は別に危ないものには見えなかった。

男の人は、自信ありげにぼくたちを見まわしてにつこり笑った。右手に棒を持ったまま、左手でポケットの中を探っている。なにか小さなものを取り出して、みんなが自分の方を見ていることを確かめ、その小さなものを手の中で動かした。カチツと音がして火がともった。なんだ、ライターだ、とぼくは思った。

右手に持った棒の先にライターの炎を近づける。急にパチパチという音がして、棒の先からいろいろな色の小さな火花が次々に湧き出した。火花はまっすぐに地面に落ちるのではなく、輝きながら傘のようにひろがったり、ゆつくりと螺旋らせんをえがきながら落ちたりした。まぶしくはないがとても明るかった。時には火花Bがうしが手をつないでくるくるとまわっているように見えた。それから、勢いよく落ちる水のように地面から跳ねあがったりした。花火を持った男の人はCを張って立っていた。

(中略)

やっとその一本が終った。② 男の人は得意そうに子供たちの顔を見まわした。みんなの目がもう一本とせがんでいた。その人はまたしゃがんで、靴を開き、もう一本、前と同じように見える花火を取り出した。今度はずくに火をつけず、埠頭のはじの方へ歩いていって、海にむかつて立った。ぼくたちは急いでその横に並んだ。

男の人はライターを出して火をつけ、その花火の先を空の方にむけた。細い青い火が線のように空にむかつて走り、そのずつと先に赤いまるい火の玉が燃えていた。男は手を動かして、その赤い火で空に絵を描きはじめた。手の動きにつれて空に赤い魚の姿が現れ、それが黄色くなり、緑になって消えた。次は鳥だった。この島でトトバイと呼ばれる鳥が高い空に浮びあがった。次は豚。みんなが手をたたいた。次は島の大きなカタツムリ。椰子やしの木。最後に男の人は顔を描きはじ

氷山だ、とぼくは思った。氷山というのはとても大きな氷の塊で、それが寒い海に浮かんでいるのだ。画の左の方に何枚もの帆をかけた船が一隻見えた。帆を張ってはいてもカヌーなどよりずっと大きな、汽船のような船だ。しかもその船は動いていた。その画面を左から右へゆつくりと横切ってゆく。その動きをぼくたちはずっと見ていた。

船が右の端へ入ってしまうと絵も消えた。男の人はすぐにまた次の一本に火をつけた。空から地上を見降した光景で、地上が深い森なのだということがわかるのにしばらくかかった。景色全体が動いていた。緑色のもくもくとした森が上から下へと流れてゆく。ぼくたちは、鳥になったか飛行機に乗ったかして、森の上を飛んでいるらしい。森の間に大きな、くねくねと曲った河が現れた。河の水は茶色く濁っていた。小さな白い点が横切ってゆくのは、下の方を飛んでいる鳥なのだろうか。河を越えても森はいつまでも続いていた。

それから、ぼくたちは沙漠さばくを見た。黄色い草の草原には黄色いライオンがいた。牧草におおわれた低い丘の斜面を羊のムdれがゆつくりと移動していった。男の人の靴の中には限らない光景が入っているようだった。ぼくたちはお互いのことを忘れていたみたいだ。三歳の子も十四歳の子も同じように夢中になって空に描かれる景色を見つづけた。

次の花火は風景ではなく、一匹の龍だった。輝く眼、金と緑に光る鱗うろこの龍が、長い身体をくねくねと動かし、自分の尻尾を追ってぐるぐるまわり、髯ひげをふるわせ、細い足の曲った爪で宙を掻いて、高い空に舞った。そんなものを見るのは初めてだった。龍がこちらをむくと、その赤い口と大きな眼が恐しかった。龍はいつまでも舞いつづけ、ぼくたちはいつまでもそれを見ていた。とても長い時間の後、それが次第に薄れて消えてしまっから、まだ空を眺めていた。

それが最後の花火だった。次の花火はもうはじまらず、ふと我にかえると、男の人の姿はなかった。黒い靴もない。来た時と同じように音もなく消えていたのだ。ぼくたちは口にする言葉もなく、お互いに顔を見あわせ、しばらくぼんやりしていた。心の半分が空のむこうに飛んでいってしまったみたいだった。

どのくらいたった時だろう、エンリカがほくのそばへそと寄ってきた。

「リランがいらない」と彼女はささやいた。

ほくはあたりを見まわし、子供たち一人一人の顔を確かめた。エンリカの言うとおり、リランはいなかった。海の方を見る。海には誰もいない。そういえばリランは今日一度も水に入らなかった。

ほくたちはあっちこっちリランを探した。埠頭のどこにもリランの姿はなく、念のため潜ってみた海の中にも、道のわきの茂みの中にも、リランはいなかった。倉庫の扉は錠が閉ったままだ。ほくたちは、カイの一番上の兄さんがビックアツプで迎えに来るまで、リランを探しつづけた。

(中略)

男の人もそれつきり姿を消した。彼はホテルに戻らず、部屋には何一つ残っていなかった。うちのホテルの帳面には「ロトス・K・ササfras 三十七歳 国籍アメリカ合衆国」とあり、パスポート番号は、誰かが水でもこぼしたみたいになじんで読めなかった。彼もリランも島を出る飛行機や船には乗らなかった。それはまちがいない。その時はよそのヨットも港に入っていなかったし、お金をもらって二人を舟でどこかへ渡したという人もいなかった。島を出たはずがないのに、島のどこにも、リランとササfras氏の姿はなかったのだ。

リランたちがいなくなった日、ほくの従兄のルーカスが釣りに出たきり戻らなかった。そちらも探さなければならぬので、みんながすごく忙しい思いをした。しかし、ルーカスの方はその五日後の朝、島から島をまわっている石油会社のタンカーに乗って帰ってきた。外洋に出たところで船外機が故障して、三日間漂流していたのだそうだ。環礁の外へ出るのに点火プラグの予備を持っていかないとほんと馬鹿な奴だとルーカスはみんなに言われた。誰かが一、二週間漂流したあげくに帰ってくることはそれまでに時々あった。戻ってこないこともたまにあった。

問一 ――部①「遠巻きにして」とありますが、これはどのような心情の表れですか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア かわった風貌の男が何かを取り出そうとしている様子に対して、興味津々で事態を見届けようとしている。
- イ こんな所に来るはずがない大人に対して、自分たちに危害を及ぼすようなことはないかと警戒している。
- ウ 見知らぬ大人に対する不信感と、何をしようとするのかという関心から、距離をおきつつ様子をうかがっている。
- エ 何かが起きそうな予感と少しの恐れを抱きつつ、火花を見られる高揚感を何とか隠そうと距離を置いている。
- オ 知らない大人には関わるべきではないという教えを守ろうと、年長者を中心に協力して身を守ろうとしている。

問二 ――部②「男の人は得意そうに子供たちの顔を見まわした」とありますが、その時の「男の人」の心情として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 子供たちの仲間になれるか焦りを感じている。
- イ 子供たちを更に喜ばせることに自信を抱いている。
- ウ 子供たちにいじめられるという不安を感じている。
- エ 子供たちが興味を失い、離れていかないと心配している。
- オ 子供と大人の壁を壊そうという信念を抱いている。

石油会社の船にボートまで積んでもらって得意になって帰ってきたルーカスは、それから何日かの間、どれほど自分が賢く上手に漂流したかという話ばかりしていた。だから、彼の口からこの冒険に直接かわりのないその話が洩れたのはしばらくたってからだった。

その日の朝早く、彼は環礁の間の細い浅い水路から外洋に出て、しばらく行つたところで船外機を停め、海錨かいびょうを入れて釣りをはじめた。少しずつ流されて島の北から北西の方へまわった頃、そろそろ戻ろうと思った。ところが何度やってもエンジンがかからない。一時間以上もスターター・ハンドルをくりかえし引っぱって、やっぱり駄目かなとあきらめかけた頃、彼はなにげなく目をあげた。

何かが西の方へむかって飛んでゆくのが目に入った。鳥だろうと思ったが、どこか違う。

[E] 高いところを一直線に飛んでいる。目をこらしてよく見ると、二つの小さな黒い点が並んで飛んでおり、[F] 見ているうちにそれは両手をひろげた二人の人間のような気がしてきた。すごく高い空を飛ぶ二機の飛行機だったかもしれないけれども、音は聞えなかった。

「飛行機って、両手をひろげた人間の形によく似ているだろ」とルーカスはほくに言った。

何だか確かめようと思って、目が痛くなるほど見つめつづけたが、結局その二つのものは遠い西の空に溶けこんでしまった。彼はまた船外機と格闘をはじめ、

[G] 不安になり、空を飛んでいった不思議なもののことはすぐに忘れた。

ルーカスは後に自分が見たのが[H] ササfrasさんとリランだったのだと言いはったけれども、信じていいのかどうか誰にもわからない。

それ以来、今まで、リランに会ったものは誰もいない。

(池澤夏樹「南の島のティオ」より)

問三 ――部③「ほくは自分がサマン岬にいることを忘れてしまった」とありますが、その理由を五十字以内で説明しなさい(句読点を含む)。

問四 ――部④「まだ空を眺めていた」とありますが、この時の心情を表した比喩表現を、本文中から一文で抜き出し、最初と最後の五文字で答えなさい。

問五 ――部⑤「この冒険」とは、どのような冒険のことですか。「という冒険。」につながるように五十字以内で説明しなさい(句読点を含む)。

問六 めめ部A、Bに用いられている表現技法は何ですか。最も適切なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア 擬態法
- イ 擬人法
- ウ 隠喩法
- エ 直喩法

問七 本文中の空らん[C]、[D]に入る身体の一部を表す語句を、漢字で答えなさい。

問八 本文中の空らん E H に入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア	E	きつと	F	いよいよ	G	じつと	H	ずいぶん
イ	E	ずいぶん	F	じつと	G	きつと	H	いよいよ
ウ	E	きつと	F	ずいぶん	G	じつと	H	いよいよ
エ	E	ずいぶん	F	じつと	G	いよいよ	H	きつと

問九 本文の内容に合っているものを、次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 終始おどおどしながら、子供たちに花火を描いてみせた男の人は、最後には鳥からいなくなった。

イ 男の人は花火に火をつけると、今まで見たことがない世界を空に描きだし、子供たちの心をわしづかみにした。

ウ 男の人が花火で描き出したものは、身近な島の生き物から、見知らぬ街の人の詳細な姿まで、様々であった。

エ 子供たちは、男の人が見せる花火の一つが終わるたびに次の花火を期待し、言葉も出ないほど夢中になった。

オ 男の人とリランは、花火が消えると同時にこの島から去り、空を飛んで新しい土地へと旅立った。

問十 部 a ｓ d のカタカナを、漢字に直して答えなさい。

a	タバ	b	ケワしい	c	ウツった	d	ムれ
---	----	---	------	---	------	---	----

れるようになりました。

I、原子爆弾・水素爆弾として、その後、原子力発電として、核兵器開発競争によって、世界中の人間を何度も殺せるくらいの核爆弾が製造されました。もし核戦争が起これば、地球は、地上から巻き上げられた塵に覆われ、温度が下がって人類は生きのびることができないと予想されています（核の冬）。さらに、原子力発電から出る放射性廃棄物は、まだ処分方法が決まらないまま、蓄積される一方になっています。

II、半導体素子の開発や洗浄のために使われた薬品やフロンガスの処分にも問題をかかえています。海や川を汚し、大気圏上のオゾン層を破壊する問題があるからです。増え続ける石油の燃焼で空気中の二酸化炭素量が増大しており、その「温室効果」によって地球が温暖化するのではないかと心配されてもいます。産業が発展し、生産力が上がるにつれ、地球という環境が無限ではないことが明確になってきたのです。さらに、遺伝子操作技術は二一世紀には本格化するでしょうが、これによって生命世界がどのように変化するのか見当もつきません。私たちは、科学の進歩によって大きな不安をかかえるようになったのです。このような未来への不安が、現在の科学不信の根っこにあると私は思います。

科学への強い「依存」と「不信」という矛盾した感情が、若い人々に広がる超能力や超科学へのあこがれに結びついているようです。自分で決心しないで占い・お告げ・霊視・大予言などに頼り、物理的に不可能な空中浮揚やトランスポーターシオンを信じたり、実体のない守護霊やオーラが存在するかのよう思う心理のことです。このような心理が「科学の時代」に広まっているのはどうしてなのでしょう。現代科学を「超える」という幻想で、わからないことへの不安が取り除かれるかのような気分になり、同時に、神秘の世界に逃げ込むことにより、それ以上深く考えなくてもすむという「安心」感も得られるからではないかと思われます。

III、科学だけが原因なのではなく、学歴が将来を決定し、会社や上役のいうことに服従して生きねばならず、変化の可能性がなかなか見えにくい、現代という時代が背景にあります。歴史的に見ても、混んとして将来のことがよく見

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

一九九五年には、さまざまな大事件が起こりました。阪神・淡路大震災、オウム騒動、高速増殖炉「もんじゅ」の事故。そのいずれのときにも、科学や技術のありよう、科学者のとるべき態度、科学教育の実態などが新聞・テレビ等でさかんに議論されました。私たちは科学の成果によって豊かな生活をおくっています、科学そのものは万全ではなく、私たちが意外にもろい基盤の上に生きていることを、これらの事件がはっきり示していたからです。さらに、現在の科学の使い方方を誤れば、人を平気で殺し、はては人類を滅ぼしてしまいかねないことに人々は気がついていきます。科学の長所と短所が、同時に見えてきたといえるでしょう。

①このような科学に対して人々が抱く二重の感情は、人類が歴史的に初めて経験することなのかもしれません。

1

一九世紀の産業革命は、ニュートン力学と熱力学にもとづいて、マクロな物質の製造・加工が、熱機関の発明を通じてもたらされたものでした。それが鉄鋼や自動車など、「重厚長大」の産業の基盤となり、それまでの人力や馬力に頼る生活を一変させました。現代の生産力の基礎も、それを受け継いでいます。

二〇世紀に入り、原子や分子というミクロ世界の法則（量子力学）が明らかにされ、エレクトロニクス技術が大きく発展しました。コンピュータや半導体素子はあらゆる電器製品に使われるようになり、「軽薄短小」の産業が発展してきました。同じ手法で生命世界の法則も遺伝子レベルで理解できるようになり、遺伝子操作が産業化される時代が眼の前にせまっています。二〇世紀は「科学の世紀」と呼ばれているように、この一〇〇年の間の科学の進歩はまさに偉大なものでした。私たちは、これらの成果の上に、これまでにない豊かな生活がおくれるようになったのです。

2

しかし、それはコインの一面でしかありません。原子の研究は、さらに原子の中心にある原子核の研究へと進み、そこに潜む巨大な原子力エネルギーが利用されない時代になると、超能力を看板にした宗教が流行しました。現在も例外ではありません。

IV、過去と現在とでは、はっきりと異なっていることがあります。やはり「科学」なのです。現代に生きる私たちは、多かれ少なかれ、科学の考え方や方法を身につけています。あまりに荒唐無稽な論理は、誰も信用しません（もちろん、マインドコントロールされてしまうと、教祖の言うことは何でも信じてしまいますが）。教団の名前に「科学」とか「真理」がついているのは、少なくとも自分たちの宗教を広めるためには、「科学的」であるという見せかけが必要だということをも物語っています。つまり、現代社会は、基本的な科学の素養を身につけた人々によって動いていることが、かつてと大きく違っている点なのです。

しかし、問題があります。科学の内容があまりに日常を離れ、また難しくなっているため、自分たちには理解できないと感じられてしまうことです。専門家もわかりやすく解説してくれないし、本を読んでも難しい数式が平気で出てくる。科学が理解できる素地があるのに、科学が疎遠になっているのです。食べられるのに、食べないまま嫌になる「喰わず嫌い」といえるかもしれません。それは、実にもったいないことですね。せっかくおいしいものがあるのに、食べずに放っているのですから。

3

私は、科学への「不信」や未来への「不安」を解消するための第一歩は、科学をもっと身近にすることではないかと思っています（「不安」を訴えるだけでは、何も変わらないのです）。現在地球上に生じているさまざまな矛盾を解決するには、やはり科学の力に頼らざるを得ないからです。つまり、私たちが現在抱えている問題の本質は何で、それにはどのような手を打てば解決できるか、を順序立てて考えることが大切なのです。

科学の力が大事だといっても、病人に次々と注射して、さらに病気を悪化させるようなことになっては何にもなりません。まず、一つ一つの問題を、あらゆる角度から検討する必要があります。だから、「科学の専門家にまかせてしまっ

はいけない」のです。市民が一人一人、自らの頭で考えて意見を述べる、それに

よって専門家には見えない側面が明らかになるのです。 4

かつて、病気を治すためと称して、本人の同意を得ず、人体実験がなされたことがありました。あるいは、もはやナチスが原子爆弾を作っていないことがわかってからも、マンハッタン計画は推進され、科学者はそれに協力し続けました（ナチスが先に原子爆弾を作るかもしれないという理由で、マンハッタン計画が発案したのです）。専門家は、自分たちが向かっている問題がおもしろければ、その解決が何をもたらすかにはおかまいなしに、研究に熱中してしまいがちです。それにブレーキをかけるのは、科学の内容を理解し、さらにそれが現実化したときに、どのような事態が引き起こされるかを判断できる知力なのです。このような専門家と市民の相互作用こそが、未来を明るくものにすることに違いありません。科学の考え方・進め方を知った市民となることが求められているのです。

おそらく、現在のままの消費構造やエネルギー使用を続けていくなら、一〇〇年もたないうちに地球は行きづまってしまうと思われれます。資源やエネルギーが足りなくなるのではなく、それらの使い過ぎで地球環境が荒廃してしまうからです。では、私たちはどのような生活へ変えていかねばならないのでしょうか。そして、それをどのような道筋で達成すべきなのでしょう。

そう簡単には答えが出そうにないこの問題には、世界中の人々が知恵を出し合って話し合わなければなりません。もちろん、国内でも、地域でも、合意が得られることが必要です。そのためには、いったいどのような手だてが必要なのでしょう。私は、手持ちのデータを駆使して、未来を予測することではないかと思っています。何ができ何ができないか、ある道を選べばどのような結果になるか、どこまでを許容できどこからは受け入れられないか、そのような予測を世界各国のみんなが慎重に検討し、一致できることから行動する、そんな手続が必要でしょう。ここに科学の力が生かせるのです。かつては戦争によって、強い国の論理が押しつけられてきました。そのような暴力ではなく、「科学の知」が世界の未来を決定してゆくのです。

（池内了「科学の考え方・学び方」より）

問六 — 部⑥「病人に次々と注射して、さらに病気を悪化させるようなこと」とはどのような意味ですか。説明しなさい。

問七 — 部⑦について、この問いに対する筆者の答えを本文中から二十二字で抜き出して答えなさい（読点を含む）。

問八 次の一文は、本文中の 1 4 のどこに補うのが良いですか。最も適切な箇所を記号で答えなさい。

もはや、科学抜き生活は考えられなくなっています。

問九 次のア～エについて、本文の内容として正しい場合は○、誤っている場合は×でそれぞれ答えなさい。

- ア 一九世紀の産業革命は「重厚長大」の産業の基盤を生み出し、二〇世紀には「軽薄短小」の産業が発展して「科学の世紀」とも呼ばれるようになった。
- イ 原子力や半導体素子などは、私たちの生活をより便利にしたが、同時にそれらの処分など手に負えない問題が公にならず隠され続けている。
- ウ 科学の発展が進んだ結果、私たちが理解しようと思っても理解できないものになってしまったため、私たちは科学から疎遠になっている。
- エ 専門家は自分の研究が面白いと、結果が何をもたらすかは関係なくつき進むので、市民が自ら考えて意見を言う必要がある。

問一 — 部①「科学に対して人々が抱く二重の感情」とは何ですか。本文中から九字で抜き出して答えなさい（記号を含む）。

問二 — 部②「それ」は何を指していますか。本文中から抜き出して答えなさい。

問三 — 部③について、この「コイン」のもう一つの面とはどういうことですか。「こと」につながるように本文中から二十六字で抜き出して答えなさい。

問四 — 部④「若い人々に広がる超能力や超科学へのあこがれ」とありますが、現代において、そのような状況が生まれるのはなぜだと筆者は考えていますか。五十字以内で説明しなさい（句読点を含む）。

問五 — 部⑤「荒唐無稽」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 無理やりにおこなうこと。
- イ 何かしようと積極的にこころざすこと。
- ウ 一時の間に合わせ、その場のがれであること。
- エ 言っていることや考えていることに根拠がないこと。

問十 本文中の空らん Ⅰ Ⅳ に入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | |
|---|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|
| ア | Ⅰ | しかし | Ⅱ | まず | Ⅲ | また | Ⅳ | むろん |
| イ | Ⅰ | むろん | Ⅱ | しかし | Ⅲ | まず | Ⅳ | また |
| ウ | Ⅰ | また | Ⅱ | むろん | Ⅲ | しかし | Ⅳ | まず |
| エ | Ⅰ | まず | Ⅱ | また | Ⅲ | むろん | Ⅳ | しかし |

問十一 — 部 a～d の漢字の読みを書きなさい。

- | | | | | | | | |
|---|----|---|----|---|-----|---|----|
| a | 素子 | b | 上役 | c | 述べる | d | 合意 |
|---|----|---|----|---|-----|---|----|

